



episode 15 私を密かに支えていた物語

投稿者 杉本 千鶴 さま(大阪府)

『スイッショねこ』
大佛次郎 文
安 泰 絵
フレーベル館 1975年



小児喘息だった5歳の私は、使う人がない広い部屋で、母や叔父が買ってくれた絵本や、「キンダーブック」を読んで過ごしていた。当時、チョンという名のポンポン尻尾の牛の三毛猫が、常に私の傍らで静かに座っていた。大人が私に話しかけるように言葉をかけ、撫でているうちに、片時も離れず着いて歩くようになった。

抑留されている父に代わって面倒をみてくれていた16歳年上の叔父が、ある日、「これ読んでごらん」と贈ってくれた「こども朝日」を不思議そうにめくってみると、「ねこ」の文字が飛び込んできた。吸い込まれ、夢中で読んだ。『スイッショねこ』との出会いである。好奇心が強く空想が好きな私は「白吉」と同化し、養生を課せられても活発で、枯山水の石橋に飛び降りたり、木に登ったりすると、お仕置きで蔵に入れられた。重い扉を大きな鍵で閉めながら、「2階の窓を開けたら明るい。おもしろい物がたくさんあるよ」と優しく諭す叔父はお母さん猫、白吉の私は薄暗がりを楽しんでいた。

長じて多忙な日常で、『スイッショねこ』のことはすっかり忘れていた。ある日、仕事帰りに寄った大型書店で『スイッショねこ』の文字をみつけたとき、「あれだ!」胸打つ動悸で早速買い求め、傍らの椅子で読み始めた。そう、生きものを優しく包み込む関わり。美しい言葉。奥ゆかしく生きるもの性を教えてくれた物語。乱雑に生きる私の生活を戒める清涼剤となり、私を密かに支えていたのはこの物語。幼児期に与えられた一編の物語が心の中で大きく育ち、存在さえ忘れていた物語との55年ぶりの再会である。以後20年、何度も読み返し、糸綴じが緩んでいるが、手放す気は毛頭ない。

滋味豊かな物語を通じて与えられた“人の有り様”には遠く及ばないが、人々や生きものを心優しく包み、穏やかで丁寧な言葉で繋ぐ日々にしたいと思う私にとっての「道しるべ(道標)」の一冊であり、できれば来世で叔父に謝意を伝えた後、静かな環境の中で深く味わいたい一冊でもある。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2023」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300~450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまつたエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



大佛次郎「一代の傑作」とは

『スイッショねこ』は、大正末期から昭和時代の文豪・
大佛次郎氏が、「私の一代の傑作」と評する、作者きって
の代表作です。大佛次郎氏といえば、『鞍馬天狗』『赤穂
浪士』『パリ燃ゆ』など多数の作品で名を馳せるだけ
なく、没後、その業績を称えて創設された「大佛次郎
賞」は、令和の現代もなお、その名を轟かせています。

作家業による名声と別に「大佛次郎」の代名詞は愛
猫家にあって、エッセイ集『猫のいる日々』(徳間書店)
にみられる猫愛そのものです。猫愛から生まれた
『スイッショねこ』は、月刊雑誌「こども朝日」1946年
10月号で発表されてから、何度も生まれ変わっている
異色作でもあります。

かけがえのない絵本を心に宿した作家

国民的大作家「大佛次郎」の心に、生涯にわたって位
置していたのは、一冊の絵本でした。『スイッショねこ』
をはじめて発表した翌年、50歳のときに、「私の最初の
本の記憶は、縁日で母親に買って貰った『鎮西八郎為
朝』の画本であった」と回想しています。「為朝の絵本」
は大佛少年にとって、「新しい世界の存在を感じて私は
幸福であった」と振り返らせるもので、子ども心にも
夢とロマンをそそられたことを明かしているのです。

深い絵本体験をもつ大佛氏が、本格的な子ども読み
物を書いたのは、昭和2年2月から月刊雑誌「少年俱楽
部」に連載した「角兵衛獅子」でした。以後、同誌で子
ども読み物を次々と執筆するのです。「角兵衛獅子」は、
幕末を背景に鞍馬天狗と名乗る快剣士が少年とともに
活躍する伝奇ロマンで、大人物の『鞍馬天狗』以上に話
題を呼び、鞍馬天狗のキャラクターは、むしろ子ども物
によって形成されたと言われているくらいです。

子ども向けの創作活動では読み物に力を入れた一方
で、童話は数少ないのですが、なかでも『スイッショね
こ』は他者評価にも傑出しているとされる秀逸作です。
作者曰く「珍しく、書いたものではなく生まれたもの

だった」作品は、自然と沸き上がってきたのでしょうか。
かつて「為朝の絵本」に夢中になった自身の絵本体験
によって生まれた「一代の傑作」のように映ります。

大佛「一代の傑作」を大傑作にした画家

敗戦の翌年誕生した『スイッショねこ』は、文章に
挿絵が添えられた童話のスタイルでした。挿絵は、
昭和期の洋画家・猪熊弦一郎氏が手がけた、なんとも
貴重な作品です。

この童話誕生から20年後、フレーベル館の月刊誌
「キンダーブック」で、絵本に生まれ変わって再登場
するのです。絵本版の画家は、日本の童画界第2世代
の中心的人物である安泰氏です。大佛次郎「一代の
傑作」に、安泰氏は画家として誠心誠意向かい合う
がゆえ、1966年の初版と、後1971年、1975年と3回
にわたって画を描き改めているのです。

5冊の『スイッショねこ』

絵本版『スイッショねこ』には、もう一人の画家が
います。安泰氏が最初の改訂作を出版した1971年に
は、講談社から同名のオリジナル絵本を刊行したの
は、画家・舞台美術家として活躍した朝倉摂氏です。
このオリジナル絵本は、講談社出版文化賞絵本賞
を受賞します。朝倉氏もまた画を描き改め、1979
年に新装版を刊行するのです。

講談社版は長らく絶版となっていましたが、2022
年の朝倉摂生誕100周年記念として、1971年の原画
を元に、青幻舎から新装版が出版されました。童話
誕生から76年目のことです。

人々の心を打つ傑作は、作者が亡くなっても、時
代が変わっても、生き生きと生き続けるのです。作
者の魂とともに。

文献

- 1) 尾崎秀樹：「スイッショねこ」と「鞍馬天狗」，飛ぶ教室，(23), pp.57-62, 1987.
- 2) 大佛次郎記念館 監修：大佛次郎と猫～500匹と暮らした文豪，小学館，東京, pp.65-73, 2017.